

# 変革するキューバとスペインー旧大陸の視点から

三浦 克仁

近年、米国との関係正常化、経済制裁緩和の可能性等で何かと話題性の多いキューバであるが、旧宗主国であるスペインと今日のキューバとの関係はどうだろうか。スペインで見聞した事項を中心に述べてみたい。

筆者がマドリッドに在勤して約二年。こちらの人々と話す中で、キューバに話題が及ぶことも時々あるが、その多くは、キューバはスペイン語圏諸国の中でも特にスペインにとって重要な国と指摘する。なぜか。「スペインが最後に手放した植民地だからね」とか、「あの島には20万人もスペイン人がいるんだから」といったあたりが説明の定番だ。前者に関しては、キューバと同年、すなわち米西戦争後の1898年にはフィリピンやプエルトリコもスペインの手を離れているし、赤道ギニアや西サハラなど20世紀後半までスペイン領だったところもあるが、そのあたりはさておき、そうした気持ちは分かんなくもない。一方、後者につき初めて聞いた時には驚いた。20万人とは尋常ならぬ数である。そんなに多くのスペイン人がキューバにいるのか。実情は、その大半がいわゆる「歴史的記憶法」によりスペイン国籍を取得したキューバ人であり、スペイン国籍者とはいえ、当地に一度も足を踏み入れたこともない人々も多いという。

話が逸れるが、「歴史的記憶法」について。スペインでは2007年、社会労働者党(PSOE)のサパテロ政権時代にこの興味深い法律が制定された。正式名称は「内戦及び独裁の間に迫害または暴力を受けた人々の権利を認知・拡張し救済措置を定めるための法律」と言い、1930年代のスペイン内戦、その後のフランコ体制を巡る歴史認識と正面から向き合う姿勢を見せた同政権の性格がよく表れているとされる。あの当時、政治的に迫害され、犠牲となったり国外への亡命を余儀なくされた人々の名誉を回復し、補償措置や支援を提供することが趣旨であり、遺族年金の充実、犠牲者の身元確認の促進、内戦と政治的弾圧に関する資料の保存、共和派に対し軍政下で行われた裁判の非合法化、フランコ將軍や内戦の端緒となった軍事蜂起を称賛する記念碑の撤去なども内容とされている。以前にもそうした復権や補償はある程度行われていたようだが、この法律によって制度的に一層整備され、範囲が拡大し、組織的に措

置される道が開かれたということだろう。

この歴史問題についてはもちろん触れないが、思い切った方策を採ったものだと思う。特に注目される補償措置として、国外追放や亡命により国籍を喪失・放棄せざるを得なかった者やその子、孫に対するスペイン国籍の取得可能性の提供がある。そうした事情のもとで母国を離れたスペイン人の一世、二世、三世が、スペイン国籍を回復または取得しうるわけである。スペイン政府によれば、対象となる移住・亡命者や子孫の大部分は中南米スペイン語圏に集中しており、この法律の施行後、アルゼンチンで約40万人、キューバ、ベネズエラでそれぞれ約20万人等々、多くの人々がスペイン国籍を取得した。キューバについては、施行の翌年(2008年)の時点で13万人強が申請を行っていたとの記録も見られる由。今後さらに増える可能性も十分ある。同法適用の対象となるキューバへの移住・亡命は基本的に内戦勃発からキューバ革命までの期間とのことだが、その時期にそれだけ多くの人の動きがあったということか。今日でもスペインでは、親族がキューバにいたりとか、自身の父母がキューバから来たといった話を耳にすることは少なくない。

なお、筆者は当地の中南米関係者と話すたびに、最近のスペインとスペイン語圏中南米諸国の関係はどうなのか、米国や中国の進出や浸透が顕著でスペインのプレゼンスは先細っているのではないかと質問している。これに対する反応を集約すると、「米国や中国が中南米におけるプレゼンスを高めているのは確かだが、それはあくまで経済的、物質的な話にとどまり歴史も浅い。スペインとスペイン語圏中南米諸国との間には、ずっと根の深い文化的、精神的な紐帯がある。そう簡単に状況は変わらないね」といった辺りに落ち着く。筆者の中南米在勤経験に照らしてそれはどうかと思うところや、悠長に構えていて大丈夫かと余計な心配をしなくなる部分もあるが、数年間の在勤では窺い知れないような深層的な要素や、外部の者が触れるべきでない同胞意識などがあるのかも知れない。スペインのフランシスコ・フランコ大統領とキューバのフィデル・カストロ議長。政治的方向性をあれだけ異にした両者が、ガリシア出身という共通項のもとで浅からぬ親交を有していたというのも広く知られる話だ。

話を元に戻すと、今日でも中南米、特にキューバを特別な国と思っているスペイン人は多く、人的、精神的な繋がりにも浅からぬものがあるらしい。それでは、実際の両国関係やキューバにおけるスペインのプレゼンスについてはどうだろう。はじめに、インターネット上でそれらしい言葉をいろいろと入力し、スペイン語、英語、日本語で検索してみた。結果、まず印象的なのは、両国関係、特に政治経済についての情報が驚くほど少ない点と、観光分野の話が突出しており、キューバの大都市やリゾート地ではスペイン系の宿泊施設が目立つ点である。これはつまり、最近の両国関係は政治経済的なニュースに乏しい一方、スペイン人にとってキューバは旅行先または観光業界の投資先としての存在感が大きいということか。そのような考えを持ちながら、当地官民のキューバ関係者にあらためて話を聞いてみた。

実業界の関係者を含め、まずは皆、先に述べたようなキューバの一般的な重要性や歴史的、文化的な繋がりを強調する。ええ、それは分かっているつもりです。で、実体的・具体的な部分を・・・と促しても、なかなか明快な回答が出てこない。話したくない、開示できない事項が多いとも思えない。実際問題としてネタが少ないのか。そのように感じつつ聞いた話や当地報道で見かけた情報を大まかに整理すると次のようになる。

## 1. スペイン・キューバ関係

かつて、スペインはEU・キューバ関係における両者の橋渡しの役割を積極的に演じていたが、最近そうした機会は減少している。対キューバ関係でEUが共

通政策をとる事例や、キューバがスペインの支援を必要とする場面自体が減っているのに加え、域内や近隣地域の諸問題への対応に追われ、経済的にもなかなか振るわない最近の欧州諸国に、キューバに限らず米州に注意を振り向ける余裕は少ないのが現状のようである。スペインについても、そうした余裕もリソースも少ない上、サパテロ前政権が民主主義、人権等の「欧州的価値」を外交に多く持ち込んだのとは対照的に、ラホイ現政権はキューバとの関係でも実務的な姿勢を掲げた（とされるが、実際はスペイン政府によるアテンション自体が減っていると考えざるを得ない部分もある。他の欧州諸国の首脳級が多く同国を訪問したのに対し、スペインの国王や首相は近年訪問がない点にも留意すべきではないか）。昨年末以降のスペイン政府が暫定政権状態にあり、重要な外交政策の打ち出しが出来ずにいる点も停滞的状况に繋がっている由。

## 2. 内政

キューバ国内の変化は緩やかであり、外的要因がどうあれ、キューバ政府自身には拙速な変化を追求する必要性も意思もないと見る者が多い。

## 3. ビジネス

(1) 当地の経済関係者は、スペインはキューバにとって、中国、ベネズエラに次ぎ世界第3位の貿易相手国である点を強調する。2015年の数値では、スペインからキューバへの輸出は9.64億ユーロ、キューバからの輸入は1.25億ユーロで、近年は概ね増加傾向にある。

スペイン在留外国人数（2016年1月） \*スペイン統計庁(INE)発表数値

| 国名                    | 人数      |
|-----------------------|---------|
| 上位5位（外国人総数：4,418,897） |         |
| ルーマニア                 | 699,502 |
| モロッコ                  | 678,487 |
| 英国                    | 297,000 |
| ドイツ                   | 192,053 |
| 中国                    | 171,508 |
| 中南米諸国（全体計：929,692）    |         |
| エクアドル                 | 158,967 |
| コロンビア                 | 135,954 |
| ボリビア                  | 89,115  |
| アルゼンチン                | 71,062  |
| ドミニカ共和国               | 62,285  |
| ペルー                   | 61,443  |
| ブラジル                  | 57,466  |
| パラグアイ                 | 50,901  |
| ベネズエラ                 | 50,074  |
| キューバ                  | 46,966  |
| ホンジュラス                | 40,584  |
| ウルグアイ                 | 24,225  |
| チリ                    | 23,026  |
| メキシコ                  | 21,602  |
| ニカラグア                 | 19,427  |
| 他の中米カリブ諸国計            | 16,526  |
| 他の南米諸国計               | 69      |

スペインの輸出入（2015年） \*スペイン経済省発表数値、単位：百万ユーロ

| 地域名/国名   | 輸出        | 輸入        |
|----------|-----------|-----------|
| 世界全体     | 250,241.3 | 274,415.2 |
| 欧州       | 176,332.7 | 168,428.1 |
| 北米       | 12,790.6  | 13,881.4  |
| 中南米      | 14,886.9  | 14,807.3  |
| アジア      | 23,916.8  | 51,917.8  |
| アフリカ     | 16,339.3  | 23,924.8  |
| 大洋州      | 1,949.8   | 773.9     |
| [中南米主要国] |           |           |
| アルゼンチン   | 1,318.6   | 1,376.4   |
| ボリビア     | 135.0     | 80.5      |
| ブラジル     | 2,730.7   | 3,135.5   |
| チリ       | 1,366.1   | 1,497.0   |
| コロンビア    | 883.7     | 1,611.9   |
| コスタリカ    | 182.6     | 179.8     |
| キューバ     | 964.2     | 125.1     |
| エクアドル    | 379.3     | 481.0     |
| グアテマラ    | 204.4     | 89.1      |
| メキシコ     | 4,265.7   | 3,614.2   |
| パナマ      | 379.4     | 43.6      |
| パラグアイ    | 100.9     | 149.5     |
| ペルー      | 594.5     | 1244.8    |
| ドミニカ共和国  | 460.7     | 102.9     |
| ウルグアイ    | 299.8     | 107.7     |
| ベネズエラ    | 360.1     | 822.2     |

しかし、輸出入ともスペイン全体（同年における輸出総額は2,502.2億ユーロ、輸入総額は2,744.4億ユーロ）の1%にも満たず、対中南米貿易（スペインの対中南米輸出は148.9億ユーロ、同輸入は148.1億ユーロ）の中でもそう目立つ数字ではない。

（2）スペインからの直接投資先としてもキューバは額面では目立たないが、ホテル業を中心に、スペイン企業は同国で強い存在感を示してきた。同国にある5星ホテルの90%、4星ホテルの60%（客室数ベース）がスペイン資本とのこと。因みに、キューバを訪れるスペイン人観光客数も近年上昇傾向にあり、2015年には10万人を超えた。以前からあるイベリア航空とエア・ヨーロッパのマドリード・ハバナ直行便に加え、本年7月に後者が開設した直行便の就航先がリゾート地のバラデロという点も興味深い。

米国の経済制裁の関係で同国資本のキューバ進出が大きな制約を受けており、言わばその空白を埋める形でスペイン企業が特恵的な地位にあった点は広く認識されている。ただし、そうした地位は容易に築けたものではないと当地関係者は強調する。キューバにおける投資やビジネスの環境は非常に特殊なため、諸外国の企業が同国に進出し操業するのは容易ではないが、スペイン企業は長い時間をかけて経験やノウハウを蓄積してきたといわれる。キューバの今後の変化が緩やかと予想される以上、この特殊性に鑑み、米国他の進出が急速に見られる事態も考え難いというのが大方の見方のようで、一日の長を持つスペイン企業は当面安定的に活動できるとの考えに基づき、スペイン経済界にそう強い焦燥感や警戒感を感じられない。

#### 4. 人的交流

先述のとおり、キューバに居住する約20万人のスペイン国籍者の多くはスペインを訪れたことがない。キューバでは近年、国民の出国に係る制限が緩和方向にあるが、それでもスペインに向かう流れは限定的らしい。スペイン統計庁の数値によると、2016年初頭時点でスペイン在住のキューバ人は46,966名。過去3年間の動きを見ると、54,942名（13年）、49,945名（14年）、46,786名（15年）であるから、昨年から今年にかけ微増したものの、減少傾向は否めないようだ。本年初頭のスペイン在留人数を他の中南米出身者と比べると、エクアドル（15.9万人）、コロンビア（13.5万）、ボリビア（8.9万）、アルゼンチン（7.1万）、ドミニカ共和国（6.3万）、ペルー（6.1万）、ブラジル（5.7万）、パラグアイ（5.0万）、

ベネズエラ（5.0万）に次いで、ようやく10番目に顔を出した。多いとは言いがたい。キューバを出国し、中南米諸国を経由するなどして米国に向かう人数とは比較にならない規模だろう。なお、キューバからスペインへの観光客については何名くらいかと数値を探したが見当たらない。統計庁にその点を聞いてみたら、極度に数が少ない国については公表していないとの反応であった。

まだまだ調べるべき部分も少なくないのだろうが、事前の予想が概ね当たっているような印象を受ける。結局のところ、今日、スペイン・キューバの政治経済的な関係はそれほどでもないのか。経済不況を機に、余裕もリソースも減少し、中南米からの移住や出稼ぎ先としての魅力が低下気味なスペイン。巨大な隣人たる米国の存在感がますます拡大するキューバ。もちろん、ある程度の経済関係や人的交流はあるが、他の国や地域に比して強い結びつきと言えるだろうか。お互いが相手をどの程度必要とし、各々の目はどの程度相手に向いているか。

スペインは中南米との間に深い歴史的な繋がりや種々の共通・類似点があり、スペイン人には旧宗主国としての思い入れや誇りがある。これは早晩変わらないものであろうし、当地で実感する機会も少なくない。スペインはキューバを含むスペイン語世界にとって、依然として文化、言語、精神的な拠り所ではあるのだろう。しかし、今日、両者間の実体的な関係がそれ相応のものかについては微妙との感が否めない。では、「歴史的記憶法」に基づいて中南米にスペイン国籍を求める動きが多数あった点はどうか。当地で筆者が懇意にしているキューバ系ジャーナリストが述べていた、「それは大抵の場合、スペインだからではなく、欧州先進国の市民権（国籍）が欲しいからだだよ」との言葉が思い出される。この辺りに一定の真実があるのか。グローバル化が進む今日の世界にあって、旧宗主国と元植民地の関係自体が大きな転換期にあるのかも知れず、スペインと「歴史的に特別な関係」を持つ国との関係も相対化が否めないのか。そのように考えつつ、そうならば随分寂しい話だなと感じる自分がいる。部外者がスペイン語圏諸国の繋がりについて心配しても、余計なお世話に過ぎないのではあろうが。

（本稿は筆者個人の観点に基づくものであり、外務省及び在スペイン日本国大使館の見解を代表・反映するものではない。）

（みうら かつひと 在スペイン日本国大使館一等書記官）